

川端康成の茨木中学校時代の恩師 「倉崎仁一郎(松江中7期)」の真実

尚綱大学 宮崎尚子



皆様こんにちは。ご紹介にあずかりました宮崎尚子でございます。甚だ僭越ではございますが、川端康成と松江の繋がりについてお話をさせていただきます。川端の恩師で倉崎仁一郎という松江の偉人について知ってくだされば幸いです。



倉崎仁一郎

倉崎は明治元年に松江市北堀町に3人兄弟の次男として生まれました＝注1。明治19年に松江中学を優秀な成績で卒業をし、佐賀の中学教師を経て、明治28年に加藤逢吉校長の招きに応じて茨木中学校に着任し、大正6年に脳溢血で亡くなるまで勤めています。

●講師紹介

宮崎尚子さんは大分県出身で熊本しょうけいの尚綱大学文学部を卒業後、熊本大学大学院文学研究科修士課程、九州大学大学院比較社会文化研究科後期博士課程で学び、尚綱高校教諭等を経て現在尚綱大学言語学部助教を務めておられます。

宮崎さんは大学1年の時に川端康成の魅力を知り、川端文学の原点ともいえる茨木中学の生徒時代に注目して、当時の生活、学業成績、茨木中学の特異な教育方針の影響などを精密に研究しておられます。この数年は何度も茨木高校に足を運び、当時の同窓会会報や学業成績表などの資料を読み込み、川端の中学生時代の実像を明らかにしてこられました。

その研究の過程で、若き日の川端康成に大きな影響を与えた松江中学出身の英語教師倉橋仁一郎しょうけいの存在を知り、その実像の解明に努めておられます。

我々としても、初めて知ったこの偉大な先輩倉崎仁一郎についてもっと多くのことを知りたく思い、また、

教頭に次ぐ立場でした。倉崎を知った経緯を説明致します。

川端文学の源流を求めて茨木高校へ

国語科教育法を担当している関係上、川端の受けた国語教育について調べようと思いました。平成23年、最初に手にしたのが茨木高校の百年史でした。川端は明治45年から大正6年までの在籍で、百年史の大正期を担当されたのが本日こちらにいらっしゃいます久敬会（茨木高校同窓会）の岩井英雅先生です。とても詳細に書かれていてバイブル的に使用しておりました。

資料室に入って調べますと、川端が中学5年の時、恩師の葬式について書いた文章が雑誌「団欒」に掲載されたものの雑誌の現物は見つかっておらず、全集にも所収されていないことを知りました。

宮崎さんの研究のお手伝いを兼ねて、その事績について種々の調査を実施しているところです。

ところで、松江中学と茨木中学の縁は、川端康成と倉崎仁一郎の関係にとどまりません。

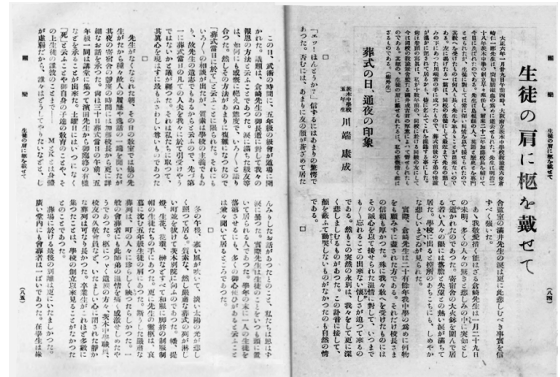
明治28年の茨木中学創立時から足掛け27年の長きにわたって校長を務めた加藤逢吉先生は、明治19年5月から12月まで松江中学の教師をしていたのです。倉崎は19年春に卒業しましたが、母校の教諭助手を務めています。この短い間に加藤先生は倉崎の人となりを認め、9年後、茨木中学の校長に就任するにあたって、新たに理想とする学校運営をしていく同志として、当時佐賀中学の教諭をしていた倉崎を呼び寄せたのです。

そういうご縁もあり、今日は茨木高校の岡崎守夫校長先生と久敬会の中村様、岩井様にもご出席いただきました。

100年を超える歳月を経て両校の間に新しいご縁が結ばれることを願う次第です。 押田良樹（高11期）



宮崎さんが見つけた雑誌「団楽」



「団楽」に掲載された川端の作品



若き日の川端康成

これをもとに、昭和2年「キング」に「倉木先生の葬式」、昭和24年「東光少年」に「師の棺を肩に」が発表されました。大変思い入れの深い作品であるのに、最初の物が見つからないことが意外でした。

倉崎は大正6年1月に亡くなっています。大正7年の川端の日記には「団楽」に載ったと回想していますので、大正6年の出版に違いない。葬儀は1月末、4月は卒業後。恐らく大正6年3月だろうと目星をつけて探して

おりましたら、運よくこの号の「団楽」を見つけることが出来ました＝注2。題名は「生徒の肩に柩をのせて」でした。

前代未聞の生徒葬——敬愛された倉崎先生

前代未聞の生徒葬でした。先生の棺を、5年間受け持たれた88人の生徒全員で自宅から葬儀場、葬儀場から火葬場と運ぶ葬列です。大変な評判だったそうでその時の写真が茨木高校の資料室に残っていました。その後、昭和7年の同窓会報で倉崎の遺影を確認しました。十七回忌の記事です。卒業生たちになお慕い続けられたということです。

倉崎は川端の学年を5年間受け持ちました。茨木高調査2年目では生徒日誌や教室日誌を調査し、倉崎が他学年の生徒たちからも尊敬され、大変慕われていたことが分かりました。その中には社会評論などで活躍した大宅壮一もいます。面倒見のよい先生で生徒の事を家族のように思っていまし

た。生徒の人生に寄り添うという美学がありました。倉崎は英語の先生でした。そこから川端は英語好きになった事も分かっています。倉崎の英語の専門性は高く、教科書も作成するほどでした。上級学校から引き抜きの話もあったようですが、生徒たちの嘆願書が出て茨木中学に残ったと伝わっています。

川端は中学3年生の段階で家族が死に絶えています。金銭的にはさほど困りませんでしたが精神的には「孤児」の意識が強かったようです。そういった時に接している倉崎を親のように慕っていたのは間違いありません。事実川端は「倉崎先生ほど私に感銘の深い教師は一人もなく、倉崎先生に対するほど私がよい生徒であったことは一度もない」と評価しています。川端文学の形成に大きく関わる人物と言えるでしょう。

「生徒の肩に柩をのせて」は「大阪府立茨木中学校五年生 川端康成」という肩書きで掲載されています。雑誌「団楽」の主宰は石丸梧平。茨木中学校を



場動運校學中木茨立府阪大
茨木中学校運動場

卒業こそしていませんが、優秀な成績で在籍していました。特別な思い入れがあり川端の文章を掲載したと思われます。「団欒」は与謝野晶子、平塚雷鳥、齊藤茂吉、若山牧水、小川未明らが名を連ねており、その中に中学生の文章が巻頭に写真入りで抜擢されるのは大変異例なことでした。

久敬会の追悼号（死去1年後に発行）によります



生徒葬の様子



倉崎仁一郎の墓

と、石丸が感動した生徒葬は、近代水泳で有名な杉本傳教諭の授業で行われた学年会の中で生徒たちにより決議されました。近代水泳発祥の地でもある茨木高校ですが、日本初のプールがこの時完成しています。生徒の共同作業によるものでした。倉崎先生の棺

を運ぶことを決めたのも生徒たちでした。

倉崎の通夜は一旦帰宅した88名全員が集まったそうです。読経した寺の跡取り息子たちの中には、あのザビエル像を発掘した藤波大超もいました。柳行李の中にあつた初代校長加藤逢吉先生寄贈のアルバムからは倉崎と少女が並んだ写真を見つけました＝注3。資料室は宝の山でした。

以上の事を苦勞して調べ上げたのですが、私の茨木高調査3年目で新しく着任された校長の岡崎守夫先生とお会いし、久敬会の方と引き合わせてくださいました。そこには今日いらっしやっている中村和夫・久敬会事務局長や、「茨高の生き字引」

と言われる岩井先生も同席されました。川端研究家垂涎の貴重資料を惜しげもなく披露して下さり、大袈裟かもしれませんが2年かかった内容が5秒で解決した瞬間でした。これが同窓会の底力と痛感いたしました。

倉崎の故郷・松江への旅

倉崎が松江中学出身であることは追悼号で知っていましたから、続いて松江中学の調査を開始しました。松江北高校に問い合わせをしましたが、残念ながら火災で資料は焼失したということでした。その時思いだしたのが久敬会という同窓会の存在で、「資料が無いなら口伝えて情報が得られるかもしれない」と、近畿双松会事務局に問い合わせをしたら、後日松本耕司事務局長から電話をいただくことができました。そこからはとんとん拍子でした。押田良樹会長はまったくの別件で楽山焼元祖倉崎権兵衛の名を知られたばかりの時だったので、同じ「倉崎」の名前に興味をそそられ、同期生で松江市在住の石倉昭子様と連絡されました。石倉様は驚異的なネットワークをお持ちで、これからお話しする事実を次々と突き止めることが出来たのです。

連日メールで届く新情報や、押田会長と石倉様とのやりとりがあまりに盛り上がりましたので、これは是非一度お会いせねばと今年の2月に松江まで押しかけ、それまでの調査でルーツが同じだったことが判明していた楽山焼倉崎権兵衛の子孫で倉崎家当代のお嬢さんを交えての会食が実現しました。このお嬢さんも石倉様の御主人の教え子でいらっしやいました。

さらに倉崎について分つた内容です。倉崎は明治19年、松江中学で物理教師であつた加藤逢吉と出会います。押田会長情報によると、松江中学の同窓会設立に関わる提案書を書いた人物として松江北高等学校百年史に載っています＝注4。交友関係は広く、小泉八雲が敬愛した西田千太郎とも親交があつたことが『西田千太郎日記』で確認できました。脚本家で知られた伊原青々園とも深い交流がありました。小泉八雲がほれ込んだ松江の人々、その”心の琴線”に触れる日本的な精神を倉崎も持っており、川端は倉崎の生き方の中に「美しい日本」を見出したのだと思います。八雲と川端の共通点に就いても今後考察していく予定です。



さて、葬儀に参列した遺族ですが、追悼号では一部しか分かりませんでした。石倉様のご協力の下、名前や年齢まで詳細に判明しました。残念ながら倉崎の直系の子孫は見つかっていませんが、兄金之助と弟清、長女シヅの嫁ぎ先の子孫の方とはそれぞれ連絡が取れ、資料も提供していただきました＝注3。

次々埋まる歴史の空白

今年の夏、4回目の茨高の調査には押田会長と石倉様も同行されました。落ち合った日の夜、松本事務局長や押田会長の同期生、田村迪子様も来られました＝写真下。初めてお会いする方ばかり



なのに、すぐに輪に入れてくださいました。翌日、久敬会と双松会の歴史的な交流が実現しました。このコーディネートをしてくださったのも久敬会

中村事務局長です。

翌日は押田会長の車で松江まで連れて行ってくださり、松江にしばらく滞在して小泉八雲と倉崎仁一郎の関係の合同調査をしました。私の厚かましさを相当なものです。双松会の皆様のご親切も桁外れです。

茨木市の本源寺にある倉崎と妻寿恵の墓は当時の久敬会が建てたものです。遺児たちへの金銭的な援助も川端の学年を中心に長期的に続けられたようです。3年のうちに両親を亡くした

遺児たちの近況は久敬会の会報に掲載されています。

寿恵の死により孤児となった遺児の悲劇的な境遇を耳にしたことで川端が自身の境遇を再認識し、具体化していなかった孤児に対する感情が具体性を帯びてきました。現に孤児をモチーフにした作品は全部で38作品ありますが、このうちの7割が倉崎仁一郎十七回忌までに書かれています。

以上のような研究結果で判明したのが次の三つです。一つは川端文学の原点である「孤児根性」の生成過程を確認できたこと。二つ目は川端が感動した倉崎仁一郎の松江的な思いやり、つまり日本的な美を確認できたこと。そして三つ目「褒めること」には教育的効果があるということです。作文の53点で自信喪失していた川端が、「団樂」に載ったことで自信を得ました。心の琴線に触れる「美」が文学だと学びました。その結果、第一高等学校では作文の成績は最高点を取ることになります。

最後に「継承される心の教育」についてお話します。今回私の研究がこのような成果をあげられたのは、ここにいらっしゃる両同窓会の方々のお力添えがあったからです。部外者の人間でも無条件で温かく受け入れてくださって、わが事のように親身に協力してくださいました。今回の研究は同窓会の方々がいらっしやなかったら実現しなかったことばかりです。そして親身になる、協力を惜しまない、人の喜びの為に尽くすという点でよく似ている両同窓会です。

日本の美、人のつながり、同窓会の底力

倉崎は川端を含めた生徒たちに、日本的な美を伝えました。それが川端康成文学にも流れています。この調査で私自身が学んだことがあります。それは人のつながりの大切さと同窓会の底力です。これは川端の「生徒の肩に柩をのせて」でも言えます。無名の中学生の文章が雑誌掲載されたのは同窓の繋がりもあったからです。茨木中学での体験や人の繋がりが無ければ、作家川端康成の文学はもっと違ったものだったかもしれません。

人は一人でも生きる事は出来ませんが、何事か成し遂げようとする際には人の協力が不可欠です。同様に歴史的な資料はそれだけでは価値を持ちませんが、人が介在することによって初めて輝き出すのです。

本日まで出席の現役学生のみなさん、部外者の私でさえこれだけ協力して下さる同窓会です。まして同窓生であればその力は「推して知るべし」です。双松会は今後みなさんにとって貴重な財産になる事は間違いありません。

出雲大社は本来、個人的なものではなく国と国等大きなものの縁を結ぶものだと聞いています。今回、119年ぶりに両同窓会の縁が結べましたのは、2月に参拝した出雲の神様の引き合わせがあったからかもしれません。ご協力いただきました多くの皆様に感謝申し上げます。それではこれで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

注1

宮崎さんが倉崎の生家が松江市北堀町だったことを知ったのは、金之助（仁一郎の兄）の子孫から提供された資料からだ。調査に協力した石倉昭子さんが松江市立図書館で明治初年の住宅地図を探し当て、倉崎家が北堀町の新橋にほど近い堀端にあったことを拡大鏡で確認した。

注2

存在が知られながら現物が発見できなかった雑誌「団欒」を宮崎さんが愛知県の古書店で見つけ出したのは平成23年8月。翌24年2月に新聞各紙に「幻の文書発見」などと大きく掲載された。川端康成記念会の川端香男里理事長は「永年の宿題が一つ解けた感じがいたします」との感謝の言葉を寄せている。

注3

葬儀に参列した遺族（宮崎さんの調査で詳細が判明。写真の人物たちも特定された）を次頁に別記する。

注4

松江北高等学校百年史（昭和51年12月発行）130Pに同窓学生会設立願書（明治19年5月）全文が掲載されている。更に168Pには倉崎仁一郎の、166P、544Pには松江中学教諭だった長兄金之助の事績が記載されている。

●講演を聴いて

双松会関係以外の方を講師にお招きするのは「空前」かどうかは分かりませんが、近年では例がなく、ある意味冒険でした。しかし、これほど打ってつけの講師および演題はなかったのではないかと、講演を聴きながらそう確信しました。

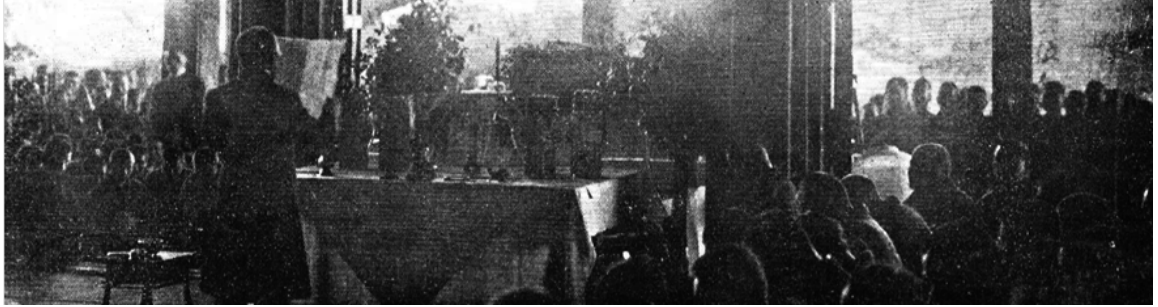
パワーポイントを駆使しながらのお話はテンポよく実証的、かつユーモアたっぷり。川端康成に我々が先輩倉崎仁一郎がどれほど大きな文学的、人間的影響を与えたかというテーマを基軸に、宮崎さんと近畿双松会、宮崎さんと茨木高校、松江中学と茨木中学……と不思議な縁をめぐる数多くのエピソードがちりばめられ、美しい

マトリョーシカ（入れ子人形）が次から次へと飛び出してくるようでした。

そして講演の締めくくりは「日本の美、人のつながり、同窓会の底力」。さすがの構成だと感服した次第です。

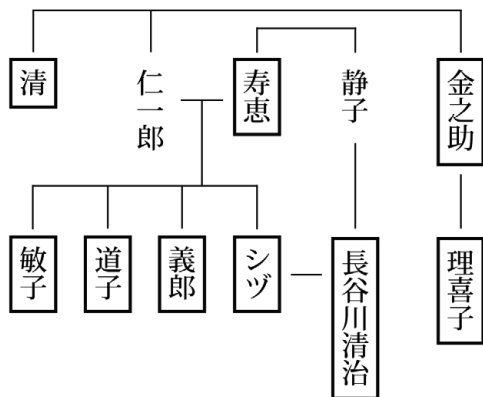
そうした講演を紙上で再現すべく努めましたが、紙幅の関係もあり、かなりの割愛・圧縮と一部構成変更を余儀なくされました。個別のファクトの発見、発掘こそが「認識」の拡張につながり、歴史をより豊かなものにしていくのであれば、今回はそれを損ねた恐れなしとします。宮崎さんはじめ関係各位、聴講された皆様のご理解を賜りましたら幸いです。

渡辺 悟（高20期）



倉崎仁一郎の葬儀

葬儀に参列した遺族



兄金之助 松江中学卒（4期）、母校の英語教師で最初に小泉八雲の文章を教材として使った人物。

弟清 松江中学卒（20期）、軍人（当時陸軍大尉、のち少将）。後に未亡人になった奥さんに倉崎権兵衛直系子孫の当代が養子縁組をして倉崎家の名を継承した。今回の調査で判明。
妻寿恵 仁一郎の三年後に死去。

長女シヅ

シヅの夫長谷川清治（シヅとは母同士が姉妹のいとこ）松江中学卒（28期）。葬儀の時点では釜石製鉄所勤務だったが、同年満鉄の撫順炭鉱に転じ、のち液化石炭（オイルシェール）の開発で恩賜発明賞を受賞。

長男義郎 茨木中学出身。川端の二級上。

次女道子 師範学校。

三女敏子 加藤校長のアルバムの少女が、親族が保管していた敏子の写真と一致。

姪理喜子 兄金之助の長女。



清



寿恵



理喜子



金之助



敏子



道子



義郎



シヅ